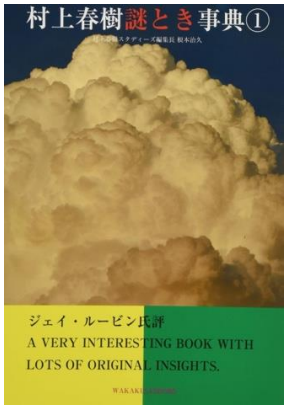
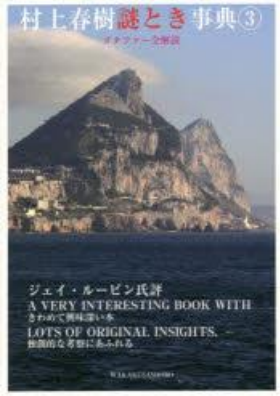
【自著紹介】 根本治久『村上春樹謎とき事典①、②、③』（若草書房、2020 - 2021）





ジェイ・ルービンに推薦文をもらった。

A very interesting book with lots of original insights.

本書の目的は、「解けない謎」とされる村上小説を、読者が解読するための方法とツールを提供することにある。方法とは、村上の知られざる発言にあるその創作方法であり、ツールとは、１村上小説の謎・問題・論点の総覧、２全小説の全固有名詞の総索引、３比喩表現の全引用解読、である。

方法は、①「僕の作品は寓話です。」（『朝日新聞』1980/5/17 夕刊）と②「僕は、良い物語を読んだり書いたりすることで、世界を変えられると信じているのです。」（『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』文春文庫 2012 561 頁）という、村上自身の発言からえられるもので、村上小説は①アレゴリーであり、②世界変革の意志によって書かれているということを意識した解読である。

村上小説が謎であるのは、作者が答えをアレゴリー（寓意）にしているからで、その答えは、世界変革につながるものである。だから村上小説の謎といわれるもの――羊（『羊をめぐる冒険』）、象（「象の消滅」）、海底火山（「パン屋再襲撃」）、かえるくん（「かえるくん、東京を救う」）、青豆（『１Ｑ８４』）、二つの月（〃）、リトル・ピープル（〃）、つくる（『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』）、騎士団長（『騎士団長殺し』）、などの答えは世界変革につながる。　その詳しい論証過程は本書を読んでほしい。村上の小説は論理的にできていて、その本文中には答えにつながるヒントが適切に書き込まれている。しかし、そのヒントの語彙は世界変革という目で読まないとわからない。

【根本治久（文学批評、編集者）】